



Title	農家の生計標準
Author(s)	渡邊, 侃
Description	研究
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 4, 1-21
Issue Date	1936-01
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10625">https://hdl.handle.net/2115/10625</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p1-21.pdf



# 研究

## 農家の生計標準

渡邊 侃

農業家族の生活状態特に生計費を調査批判することの重要さを認めたのは佛蘭西の社會學者ルプレー<sup>1)</sup>である。彼は「家族が資源を如何に用ふるかを知れば其の家族の性質が知れる」と云ふた。而も彼はそれを物理或は生理、乃至は經濟的にさへ考へたのではない。消費せらるゝ物質の量が其の家族又は社會の幸福を示すものでなく、消費の流儀<sup>モツス</sup>乃至道德<sup>モラル</sup>が重要であるとした。流儀とは其家族獨特なること、其の來る所以は其農場生産物による自給自足である。特に安定したる一系家族<sup>2)</sup>が長年月に作りあげたるものである。それで、もし物質消費が過大贅澤となると將來の道德性が破壊せらるゝものと考へた。文明と云ふ複雑多岐化は悪く、寧ろ野蠻なる單純が必要と考へた。乏しきを憂ひず齊しからざるを憂ふと云ふ考へに近いのである。即ち寧ろ低い消費標準が民衆を幸福に必

- 1) Le Play (1806—1772) に就ては岡田謙、農村社會學者としてのフレデリック・ルプレー、臺灣帝國大學理農學部農業經濟教室編輯、農林經濟論考(昭和八年)
- 2) La Famille Souche, Stammfamilie, Stem Family—家長によりて司配さるゝ大家族でも夫婦及小兒のみの小家族でもなく、嫡子たる相続者の夫婦小兒を包含する直系にて成立せる家族・財産及經營を繼續するものである。

要なる社會行動に訓練し、其の結果は良好であると考へた。然し世の中は思ふ通りには行かぬ。或は豊作凶作、或は景氣不景氣、或は生産機構の變化、社會的流行の變化と云ふ風の變化が影響し或時には貧澤、不道德となり、或時には節儉、道德的となる周期が存在するとした。

最近でも佛蘭西には同様の考へを持つて居る人がある、デュルケム派のハルブワックスの如きがそれである。生活が低く賃銀要求も低いことに對し、或は賃銀の餘剰によつて生活が向上すること、生活が高いことによつて賃銀要求を増すこと、は波動的な關係だと考へて居る。

明かに世界の人々はそれぞれの生活流儀を持つて居る。其の出發點は自給自足である。(敢て歸着點も自給自足なりとは云はない) ラウル教授によると、各國の農業簿記統計に徴して、農家の生産物の市販割合は四一―九五%の隔差があるが、文明國にして大經營なる程自給を減じ、最近は特に其の傾向が著しいと云ふ。而も農家生計費中自給は必ずしも少額ではない。瑞西では農家生計費中四分一が自給せられて居る。唯販賣が増加したのである。

本邦の農家は支那のそれと共に市販割合の少いものに屬して居る。但し多額の小作料が現物納せらるゝを除外して居ない。或は米作農家にして米を多用することも當然である。然るに畑作農家にしても畑作物を食糧用とすることは少くなつて來たと思はれる。裸麥・大麥・蕎麥・稗・黍・粟・甘藷の作付反別は歐洲大戰後著しく減じた。

北海道の實情で見ると、開墾地等の極度の状態に於て裸麥・黍等を單純に炊いた主食を用ふる外は概して米を混炊して用ひるので、家族一人當りの米の消費量が年一俵(四斗)乃至二俵半(一石)位にはなり、之に雜穀・馬鈴薯等が混炊されて用ひらるゝものであると思ふ。都會人が日量米三合で足るに對し田舎人は此の外に雜穀同量を要すると云ふ様のものである。

- 3) 此項 Zimmerman, & Frampton: 'Family & Society.' 35 參照、此書は半ばルプレーを翻譯祖述し半ば米國 Ozark 山地の一家家族を序述してゐる。  
4) Dr. E. Laur: 'Erzeugung für den Markt od. zur Deckung des Eigenbedarfs in der Landw. B.ü.L. B.XIX, H. 1, 1934.'

日本人が米を用ひないで雑穀のみを食ふては濟まぬ理由は畜産物を消費せぬ故であるとも考へらる。雑穀は米に比し特異の味を持つて居る。之を消すに足る強烈な味が必要である、それだから畜産物の様な強烈な味がなくば雑穀は消費出来ぬかも知れぬ。吾外國の食事は畜産物を中心として居て、穀物や其他植産物は副たるものである。

然らば日本人も亦畜産物消費を増すべきであるか。或程度まで然り。然し或程度以上は不可能である。肉の消費は歐米でも減する傾向にある。肉特に牛肉の生産の如きは多くの土地を要し不經濟となつて居る。肉食が動脈硬化とか痛發生とかを惹起するてう考へは或程度の眞理であらう、其の爲め特に菜食せねばならぬとは考へられぬ。然しヴィタミン學説が盛になつて以來、新鮮なる蔬菜果實及び牛乳の消費を奨励せらるゝ様になつたことは明かであり、且之等の新鮮物の貯藏輸送の如きも進歩し廉價に供給せらるゝ様にもなつたから、益々よいと考ふべきである。然し乍ら斯かる新鮮物の味は肉や乳製品の様**に強烈なる味を持たず雑穀消費を容易ならしめる効がない**であるまいか。其意味に於ては北歐人がライ麥の黒パンと肉の多くはいつた汁を消費するに對しフランス人が白いパンと新鮮なる蔬菜を愛する様な對比の後者が日本人には適するであらう。故に私はやはり白米と魚と蔬菜が邦人の食品の基本となり一部に牛乳・乳製品・雑穀が用ひらるゝものと思ふ。其意味に於て畑地農業・水田農業・漁業は其生産物を交換すべく、單なる自給自足は成立し得ぬことは勿論である。而も一方に於て、養蠶の發達、米作の邊境への推移等によつて本邦農業の自給自足性は少くなる理であり、益々分業交換的性質が多くなるであらう。

## 二

自給自足の精神的基調を考へて見やう。

人が社交性を持つ意味に於て、自給自足は好まれぬ場合もある。木村莊太氏の「農に生きる」の内には面白い例が掲げてある。

「陸稻を作るのがこの人は大變うまいと此頃きいて私はその内自分も作つて見たいと思ふて居る陸稻のことを參考に尋ねると、この人は其栽培の仕方や何かを色々話した後に、漢文口調で一才諧謔と受取れなかつた程重々しく、かう眞顔でつけ加へた。『陸稻は食ふと身體の組織が變つて來るやうだ、どうも喰ふた奴の頭が硬化して來るやうだ、どうも其結果小作爭議だの何だの事が囂かまなしくなつて來る。それが陸稻の缺點の様です。』

又一人は字の讀める小作人だが包紙にもつて行つた古新聞紙を拾つて―彼等はもう反古になつてゐる一つの事だか解らない様な古いのさへ（新聞であれば）そんなに讀んでたのしむ。日々新聞一つさへ自分でとつては讀めないのだ、でもまあ米と味噌だけはあつてそれに豊富な畑のものゝある夏のことであつた……『こちとらと来た日にはまあ畑に物を植へちあバク／＼喰つて生きて居るだけなんだからまるつきし蟲けらと違ひはしませんや。』……」

京大の大槻教授<sup>6)</sup>は「農民の都市崇拜心理に原因する所の農家の消費生活の過度市場依存的―又は流通經濟化的状態……は恰度我國民の開國以來の歐米崇拜的心理が舶來品を過度に優越視し……國民の經濟生活を今日に於ても尙海外市場に依存せしめて居るとよく相似する……農家の消費物に對する主觀を矯正し高めることによつて農家の自給自足部分を經濟的合理的に遙かに擴大することが出來る」と云はれる。農村指導者達が農家經濟の自給自足性を強調したことは古くからの事であるが、最近益々力を強める。此意味に於て木村氏の述べた如きは農民の頭だけが進んで、不必要なる交通文化的影響を受けたるが故に生ぜることの様に思はれる。

然しながら専門大工業の生産物は熟練と大量生産の故に廉價である。同じく木村莊太氏の内から引く「近頃私の所へは界限きつての大盡だと云ふ或百姓の主人が來るがそこで主人の妹がいまだにトン／＼機を織つて居る

5) 大槻正男：農村不況の根本的動因としての農村の消費經濟的地位の低下 農業經濟研究 一〇ノ一 昭和九年一月

いつも仕事着のまゝで來ることが多い。主人も妹も大抵素足である。概して固く古めかしく田舎らしい一箇の趣味から云ふと、今時には珍らしく面白く打棄難いところがあるが、然し現在の農村では町の店頭にある都會風な模様や色彩等を拒否して地味な家用の手織木綿を飽くまで自家の椽側で織るなど、云ふのは一二の大盡にして僅かに出来る贅澤な趣味に過ぎない」

大槻教授も「限度を超えたる自給自足の努力又は其促進獎勵は獨り全體としての國民經濟を破壊するのみならず、ひいて又個々農家の經濟を不利に導くであらう。今日に於ては全世界が一つの分業による協業組織である。之を個々國家が人爲的に國家經濟の大きにまで、分割縮小する時に既に顯著なる生産力の低下を伴ふ」と云ふて居らるゝ。

一つの例を挙げやう。食品を包む材料として竹皮を用ひたのは一つの廢物副産物利用であつたらう。然るに今では經木が用ひられ、更に竹皮を模造した紙製品が用ひられて居る。眞の竹皮を用ふる如きは全くの贅澤となつた。

唯今の時は反動時代である。ホーム・スパンの服地が流行し農民藝術がもてはやされる。世界經濟よりはプロツク經濟が、中央集權よりは地域主義が主張せらるゝ時代ではある。それだけ不平の危険もある。

然しながら生計標準なるものは一つの勢ひ、流れと云ふ様なものである。一旦開かれた感覺は激しい欲望を起さす。それは再びもとにもどすことの容易ならざるものである。

### 三

主觀的な欲望は生計標準を定めるであらうか。必然的なる欲望ネセサリー（生存に必要なものを欲求す）と身分的な欲望デセンシ（社會的に或職業或階級に適當と思はれるものを欲求す）との満足とを加へて生計の能率的標準エフィシエント、スタンダードとすると云ふても欲望の熾烈と薄弱なるとを問はねばならなくなる。然し之れは恐らく習慣と環境との關係より來るものでな

からうか。平常の生活に對し欲望は關係がない、平常生活が破られるれば欲望が覺醒される。

平常生活なるものは各々均衡した存在である。或は個人的、家族的以上に地方的社會的に均衡して作られたるものと云へやう。如何となれば各人は模倣し、競争して、均しからんことを求めるからである。或は少くも社會的な生計標準が民衆の意欲の世界に潜在して居る。収入の少き階級は其消費を節約せねばならぬが、其少き収入が一度増加した場合に如何様に顯現するか興味ある問題である、即ち潜在せる社會的な生計標準即ち意欲の實現は如何になるか。

急激に増加したる収入者即ち所謂成金 *Nouveau riche*, *Parvenue* が費す所は如何、今日の様に種々な誘惑的な商賣が許されて居る際に、人々の意識又は無意識の慾望が潜在し爆發し得る。其手段として投機や犯罪やさへもがあり得るのだから斯かる状態が發生するのであらう。然し乍ら斯の如きことが勞作的なる農業者間に起るとは思はれぬ、寧ろ常習的なる投機者流に起ることであらう。激しい労働の痛苦を和ぐる爲めに酒等が用ひられ遂には酒の爲めに働く様になり、屢々強い燒酎を用ふる農家がある。「百姓の多くは酒をやめしといふ、もつと困らば何をやめらむ」と云ふ歌は同情するやうな馬鹿にする様な意味があるが、酒を飲まねばならぬ様になるのは困つたものである。「飲む、打つ、買う」と云ふ様なのが、最低生活の慾望として誘惑力を持つことは社會の惡機構であるが、此處には論外とする。

之に對し稍緩漫堅實に増加したる収入が健全に用ひられて如何様に其生活様式を變ずるか、或は其の階級・職業又は環境下にあつて合理的と考ふる生計標準の擴張は如何なる形で起るか。

之に關してコンモンズ<sup>6)</sup>は下の如く考へて居る。労働者と農民との心理は異なる。前者を賃銀<sup>ウエーリヤイコロジ</sup>心理を以て測るならば後者は地代<sup>レント</sup>心理を以て測られる。前者は賃銀が少い間は全家族——婦人も小兒も——が働くが賃銀が増せば婦人は家庭又は社交生活に移り、子供は學校に出され、別に貯蓄等されぬ。然るに農民は富裕になつても婦人、小兒共に働き唯頻りに土地を求め其地價を高めるのである。

前者を以て生計標準の高上と見らるゝは普通であらう。如何となれば現金的な支出申特に文化的支出が多くな

6) J. R. Commons : How organized labor uses standard of living as a practical objective. Standard of Living, proceeding of the 13th. American country life conference. 1930

るからである。後の場合には生計標準の向上としては表現せられない。

此の意味から云ふなれば農家の生計標準の向上と云ふことは収入の増加によつて得らるゝものではないとも考へられる。そこで標準を與へよ農業經營の目的は結局其の標準の實現ではないかと云ふものも多い。

即ち農家は欲望に覺醒して居ないから之を示してやる必要ありと考へて居る。フランスでは農家は美食するに拘はらず便所の設備が甚だ不完全だと云ふ。繁榮時代のアメリカ農家生活改善方針には給水設備の必要が稱へられた。

然し概して云へば之等の主張は好況時代の話であり、未だ収入の少い爲充分の生活改善が出来ずに居る場合が多い、唯どれだけ収入が増せばよいのであるか明かな觀念を持たぬのが欠點であるとも云ふ<sup>8)</sup>。或は自給自足によりて生活を改善するとすれば家族勞働の緩和を計り、婦人特は主婦の勞働を少くせねばならぬであらう<sup>9)</sup>。

尙最近大槻教授は（經濟往來昭和十年）本邦農家では婦人も働くから勞働が過剩となり生産物は過剩となり農家は益々窮迫するのだとせらる。面白い考へである。工業界にては先づ少年次ぎに婦人の勞働が禁止又は制限せられ、男子勞働も時間賃銀等の制限を受ける様になつた。法律規定がその助けをなした。然し乍ら少年及び婦人の勞働が可能にして經濟的なる限りそはやはり行はるゝ理である。時間を短縮したる男子の勞働として經濟的なるに至つて眞の工業となる。特に農業經營の如き自家・家族・勞働を主とするものに於て然りである。さらば、如何にして經濟的に少年及婦人の勞働がなくなるであらうか。農業にありては犁耕の發達がそれを眞に男子の仕事とした。重工業にして始めて小兒・婦人・長時間の勞働を廢除する。申し合せ乃至法律による制限はそれを助けるに過ぎぬものではあるまいか。人は往々にして農業界に報酬漸減法則の支配があるが故に不利なりと云ふ。私は報酬漸減法則は如何なる零細勞働をも兎に角報酬する故に個人的には有利ならしめるが社會的にはなほさら農業を不利ならしむるものと思ふ。故に報酬漸増の關係に於て働かしむる必要ありと思ふのである。尙ほ此の意味に於て生計標準なるものは極めて彈力的であつて種々なる程度を有することを知り得る。收支適合は相當に出来るのである。唯見込違ひによつて一時的な收支不適合が起ると云ふべきである。

- 7) J. D. Black : What is to be done about improving farm family living. do.  
8) B. H. Hibbard : The standard of living and ability to pay—some conclusions. do.  
9) 拙稿：二個の農家經濟例示、北海道帝國大學法經會論叢 第二輯（昭和八年）



食料	衣料	住居什器等	醫藥	其他(小遣を含む)	保險及貯蓄	稅	經營費
三六六	六六	一四	三六	三三	三六	一〇	三六
五六七	一三五	一五四	一五四	四二	一五	三七	三
四三	九四	六九	二一	四八	三	四七	五
四五	一五六	九八	三	七五	八	九八	九
六五九	二三五	二四〇	四	一四六	九	二二	二
五六	二四四	一五	三五六	六七	一〇	三一	三
四五〇	二八三	三四一	一八	三七	一〇	三	三
六五〇	一五	一八	一〇	五	一〇	四	四

日本府縣農家經濟調査

(昭和五年度分農林省農家經濟調査、昭和七年發行による)

(金額 但自給見積を含む) (總額に對する百分率)

飲食	嗜好品	衣服	住居什器光熱	保健衛生	教育修養娛樂費
三六三・六三	四・八二八	七・八一五	一〇八・七七〇	三七・七七一	五・〇五三
三四・二五	三・三九	五三・六八五	八三・六九六	四六・八四二	三・〇八一
三四・六四	二六・〇〇九	四四・六三〇	七五・九三五	三〇・四三三	一五・九八九
三四・七六	三・三	五九・五九二	九・六〇五	三八・六五五	三四・九八〇
四三・三	四・三	七・七五	二・四	四・八	四・四

農家の生計標準

農家の生計標準

諸 冠婚葬祭及交際費	計	總額 百分比中 内他より購入等	減價 自給	額
二四九・四〇 一・六〇 一・六〇 二・〇〇 三・三〇 七・九	九七九・七	(三七・六)	(九七五)	(二九)
一〇八・三 一・一 二・一 二・一 一・五 五七・七 七・八	七七・七 七・四	(五七・六)	(五七〇)	(一七)
六・七 (二三四) 七・七 (一・一) 四・八 (六三)	六二二・五	(五一・一)	(四七〇)	(一九)
二・一 (二四九) 二・四 (一七) 八・三 (七七)	〇〇・四 九	(五三・三)	(四二五)	(二五)

北海道農家經濟調査 (北海道農會調查)

飲食 嗜好 衣服 居住 保健 教育 冠婚葬祭及交際費 雜 附 計	昭和三三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年
費 食 品 費 居 住 器 具 熱 費 保 健 衛 生 費 教 育 修 養 娛 樂 費 冠 婚 葬 祭 及 交 際 費 雜 附 及 公 課	四六・六 一六・五 一七・五 一〇五・七 四四・〇 一〇一・四 二一・五 八〇・五	五五・九 一五・五 一四・八 一〇五・七 四四・〇 二六・六 三三・六 一六・〇	四四・四 三三・九 一〇九・九 一〇五・六 一〇五・六 二〇・四 一五・六 一〇五・六	五三・三 二五・三 三〇・七 四四・六 四四・六 二〇・六 七・四 六五・七	五三・八 一五・七 八〇・五 三三・四 四六・七 五〇・五 八五・八 六・四 六五・七	五七・三 二六・三 二二・四 四二・三 五五・六 四四・六 八七・四 二一・〇 六五・七
計	一〇三六・四	一三九・七	一三九・七	六五二・六	六五二・七	六六六・四



嗜好品費	衣服費	住居什器光熱費	醫藥費	教育修養娛樂費	通信交際冠婚葬祭費	其他	計
一〇・八七	三六・〇五	二五・一八	二〇・五六	七・六一	五〇・三〇	六七・〇〇	二二・三〇
七・六一	三三・三五	六〇・三三	八・〇七	二二・七三	五〇・三〇	六七・〇〇	二二・三〇
一〇・九八	一五・五九	三〇・七三	三八・〇七	六・〇〇	四三・六四	三八・〇七	三八・〇七
一九・六四	四〇・二九	二六・二九	五三・八四				

昭和六年分は四月始より翌年三月末、七年分は四月始より十二月末、八年分は一月始より十二月末であるから此三年分の利を二・七五で除し平均すると四六七・八〇となる。以下平均は此の算法を用ふ。  
 其各個の經濟を示すと下の如くである。

國名	土性	總額				消費單位			
		昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	平均	
A 稍大なる畑混同(乳牛飼養)經營									
1 十勝 幸 震 (高丘地)		三六〇・七六六	三九八・三三三	五九八・三三五	九五・二〇〇	九一・九七〇	一五三・三九〇	一一三・五〇〇	
2 北見 上 斜里 (高丘地)		四四六・一三九	五二二・六九八	六七七・六〇〇	一〇九・〇八〇	九八・六〇〇	一三三・二〇〇	一一〇・二九〇	
3 後志 神 丘 (高丘地)		五〇〇・八八五	六七二・五五三	七四七・四〇〇	八五・三九〇	一一七・八二〇	一一八・六三〇	一〇七・二八〇	
4 膽振 早來(A) (灰火山)		四六六・二七八	三九一・二二三	七二二・五七九	五九・三六〇	四七・七〇〇	八一・五〇〇	六二・八五〇	
5 膽振 喜茂別 (傾斜地)			一九〇・五六五	三二二・八〇八		四〇・五七〇	八九・三七〇		
B 主畜(乳牛飼養)經營									
6 後志 岩尾別 (高丘地)			一八六・二一九	四五三・一〇五		一八六・二二〇	三二六・五五〇		
7 根室 中標津 (高丘地)		二九三・三三二	四三六・五九四	四四四・四三八	八三・七三〇	一一一・九五二	二二二・四五〇	一〇六・三七〇	
8 北見 沼 川 (粘炭)				五〇二・八八七			一一八・九五〇		
9 石狩 琴 似 (泥炭土)		一九〇・六六四	四〇〇・八二七	五六七・七七六	三七・三六〇	八九・三三〇	二六・〇六〇	八四・二五五	
10 膽振 早來(C) (灰火山)		二六六・三四四	三三八・八八六	二六五・三三三	六三・〇一〇	一〇九・四六〇	九四・七三〇	八九・〇六〇	
C 水田經營									
11 日高 靜 内			三三六・七〇八	五九七・七七九		二一九・五〇〇	一七九・〇七〇		

12	石狩 永山	四三九〇・九三	三四五・〇〇	五三二・四三三	一〇四・五五〇	一〇八・〇〇〇	一六〇・七〇〇	一一四・四二〇
13	北見 野付牛	四九五六・六二	五六六・九四	六八一・八九五	七一・八二〇	八三・七四〇	一〇三・三三〇	八六・二九〇

4の生活費の一人當の甚だ低いのを多少記入漏ある爲と思はる。然し節約生活をなせることも明かである。13は不作の影響が強く顯れて居る。然らざれば例へば11、12の稲作經營の生活費は高き方である。5は稍々紳士經營の如きものである。

以上を通覽すると、消費單位一人當一年生活費の平均の最低は六二圓餘から最高は二〇六圓に達するが大體一ケ年百圓位を以て普通とするものゝ如くである。地方別・經營別には明かなるものがないが、唯自給の雜穀食を爲す如き生活は廉價にして、米食をすれば相當高價につき、尙多少文化を取入るれば甚だしく生活費を増すと考ふべきである。即ち生活様式が主たる決定要因であつて其の様式の定まる所以は主として收益であると斷言して誤なきものである。

### 五

漸次具體的に技術的に農家の食衣住標準を決定する問題にはいつて行く。

思ふに、人間の適應性に基づき、地方的に自給自足に基づいて、人間活動に必要なものが供給され、其の需給の均衡として生活標準が定まるであらう。

先づ食料の問題をとる。

極く素朴な方法として食料の供給する熱量を見なければならぬ。

「人間の食慾は細胞の要請—人間の身體を造つて居る全細胞の物質に對する要求」である。

「全世界の人類は（この）非常に大きな社會事變や或は大きな危險に曝されない限り先づ大局として今日まで大

12) 倉敷勞働科學研究所長岨岐義等氏：「勞働と榮養」（農村更生協會—昭和十年）

多數の人間が榮養の満足なく従つて健康を害すると云ふ様な非常に不満足な食料をとつて來、また現在もさうである云ふ様なことはない。まあ少くとも各國民ともその細胞の要請に従つて食料を選択して食つて自分の健康を維持し生活能力を支へしかも全體として向上の途を辿つて來たと大局的に考へて差支はないと思ふのであります。

蛋白質の量は一定の最少限度まで低下することが出来る（最少蛋白量）——人間が働かないで寝て居るに必要なエネルギーの約四%で足る。即ち、本邦人各種職業者の一日食物量は總カロリーにて二千乃至三千五百カロリー、即ち基礎代謝値たる一日千三百カロリーの二—三倍となる。蛋白は四、五十瓦から八、九十瓦の範圍である。

明かに、北海道のアイヌも樺太のオロッコ人も朝鮮人も蒙古人も必要なエネルギーはとつて生活して居る。反つて原始的アイヌ生活もオロッコも魚類と油とを多食する。蒙古人は牛乳・乳製品・肉類を多食し少量の穀物・蔬菜及び茶を採る。之等土人の生活の最大の欠陥は住の方面に存し、食料は反つて贅澤だと云ふべきである。天然資源の濫費も甚しい。歐米人の衣食住は此の如きものから發達したであらう、それが穀物・馬鈴薯・甘藷の如きを多く取り入れたと解すべきである。之に對し亞細亞沿海島嶼の民族は穀食・蔬菜・果實食を主として來たものもつと獸肉・生乳・乳製品の使用を奨められて居るわけである。多少は其地方的な必要から差異が出る。前記土人及歐米人は概して北方嚴寒の地に住み多くのエネルギーを必要とし、後記の亞細亞人は熱帯に住みエネルギーの少きを以て満足するであらう。

孟子は「五畝の宅之に樹うるに桑を以てせば五十の者以て帛を衣るべし雞豚狗彘の畜その時を失ふことなければ七十の者以て肉を喰ふべし」（卷一、惠王章句上第三段）と云ふた。之に對し釋迦は「比丘等よ私は午後の食を止めて一日一度の食をとる様になつてから病もなく健かき安らかさを覺える様になつた。汝等も而せばよいであらうと思ふ」と論した（巴利中阿含經第七十）（以上東京朝日新聞、昭和四年十月、宮城長五郎氏による）前者が北方型であり後者は南方型であると考へ



右を一九三二—三三年小賣價格にて計算せるもの。(一人一年弗)

活標準を比較して見る。	自給品				自給品			
	量	價格	量	價格	量	價格	量	價格
激しく働く男子	七九	一〇四	一〇一	一二	五七	七六	一四三	二、三〇五—二、四四四
普通に働く男子	六三	八六	八五	一〇	六六	八二	一〇三	一、九九五—二、一五六
五歳以上の働く男子	七六	一〇〇	七二	八	七二	九三	一〇三	一、九九五—二、一五六
激しく働く女子又は	七〇	九五	七二	八	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
三—五歳の働く男子	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
普通に働く女子又は	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
三—五歳の働く男子	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
激しく働く男子	七九	一〇四	一〇一	一二	五七	七六	一四三	二、三〇五—二、四四四
普通に働く男子	六三	八六	八五	一〇	六六	八二	一〇三	一、九九五—二、一五六
五歳以上の働く男子	七六	一〇〇	七二	八	七二	九三	一〇三	一、九九五—二、一五六
激しく働く女子又は	七〇	九五	七二	八	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
三—五歳の働く男子	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
普通に働く女子又は	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六
三—五歳の働く男子	六〇	八三	四一	六	六六	八二	一〇三	一、九四五—二、一五六

之に對して前記ジンマーマン及びフラムトンが掲げる最も自給自足的なオザーク山地の農家の生活標準を比較して見る。

主要なる食料を平均し邦量に換算すると次の如くである。

自給品	量	價格	自給品		量	價格
			購入品	量		
鶏卵	一、四七五	二、八二	麥粉	六六・〇〇	一〇七・五	
牛乳	八八・九	六七・〇〇	砂糖	三〇・〇〇	一一・六九	
バター	八八・五	一七〇・〇〇	鹽	二八・五〇	二・五〇	
蜂蜜	一、二・〇	三三・九三	其他	—	二七・五〇	
ウイスキー	五升	一〇〇・〇〇	其他	—	五二・四四	
其他	—	三三・一三	其他	—	三〇三・一八	
計	—	三三・一三	計	—	—	
其他	—	三三・一三	計	—	—	
計	—	三三・一三	計	—	—	

次の計算は上にも掲げたる北海道農事試験場経営試験概況調査の材料を用ひ穀物の依は總て四斗として改算した。一升重量によるのが正當であるが、穀物により或は十六貫、或は其以下と變じてあるのは大體四斗の容積にする爲めであるから大差ないものである。但し燕麥の石は二十貫（十貫二俵）である。又馬鈴薯の依は一五貫、牛乳一石は五十貫とする。（牛乳消費に就ては別に書く）

溫量は品質により異なるものであるが各種穀物一升當り大カロリー（一〇〇〇カロリー）を次の如くする。

白米	四・九	玄米	四・四	大豆	四・七	小豆	四・四	豌豆	三・九
菜豆	三・七	稗麥	三・七	ライ麥	三・六	小麥	三・四	粟	三・四
黍	二・九	玉蜀黍	二・八	大麥	二・七	蕎麥	一・九	燕麥	一・四
稗	一・〇	馬鈴薯	(一×)二・九						

經營の種類

1	十勝國	幸震	高丘地畑混同(乳牛飼養)經營
2	北見國	上斜里	同
3	後志國	神丘	同
4	膽振國	早來A	火山灰地同
5	石狩國	發寒	泥炭地主畜(乳牛飼養)經營
6	膽振國	早來C	火山灰地同
7	石狩國	永山	水田經營
8	北見國	野付牛	水田畑混同(乳牛飼養)經營

農家の生計標準

家族數及び食料(穀物及馬鈴薯)・温量(一ヶ年大カロリー)

種類	家族數 (消費單位數) (勞働單位數)		温 量		一人當 (消費單位當) (勞働單位當)	
	(人員數)	(消費單位數)	(消費單位當)	(勞働單位當)	(消費單位當)	(勞働單位當)
1	七・六七	七・六七	四六六五・八	一・三三	一・四〇〇	一・三三
2	七・六七	七・六七	五、〇八三・九	一・〇三三	一・〇三三	一・三三
3	一〇・〇〇	六・〇三	五、六三二・四	九三三	一・四三七	一・三三
4	一三・〇〇	七・八七	七、〇八二・七	九〇〇	一・六一	一・三三
5	九・三三	四・七三	七、二五一・一	一、三三三	三・三三〇	一・三三
6	五・〇〇	三・三三	四、三三七・七	一、三五四	一、〇〇〇	一・三三
7	四・三三	三・六三	四、五四八	一、一四五	一、二〇〇	一・三三
8	九・三三	六・八三	六、九六六・五	一、〇三〇	一・五二八	一・三三
平均						

之は前記米國標準の節約の分には當る。外に麵類・大小豆・茶豆・豌豆・牛乳・鶏卵・魚獸肉・蔬菜果實・砂糖等が採られるから不充分とは云はれない。

穀物及馬鈴薯用量(一ヶ年)

種類	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
白米	三・三石	二・三石	三・八石	三・〇石	七・三石	三・五石	九・四石	一・三石	三・〇石
玄米	〇・二七	二・六三	〇・〇九	一・〇三	三・六〇	三・八七	〇・四〇	一・五五	二・三九
小麦	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・二四	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・五一
大麦	〇・五五	一・七〇	〇・八八	三・三三	三・五八	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・〇〇	〇・四四
燕麥	一・四八	三・五三	二・七六	〇・二六	一・七六	四・七二	一・五八	〇・九五	一・五八
蕎麥	五・〇〇	一・三三	〇・四〇	〇・〇〇	一・七六	一・五八	〇・九五	〇・八五	〇・八五
平均									

穀物の用量は米國標準より多いがジンマーマンのオザーク農家に於ては似たものとなる。

單價評價額 (單位圓)

種類	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
馬鈴薯	一七・〇〇	四〇・〇〇	四三・〇〇	一〇〇・〇〇	一八二・〇〇	四八・三〇		一〇五・〇〇	二八六・九〇
玉蜀黍	一〇・〇〇	〇・七九	二・五一	〇・九五	〇・六五				〇・〇三
稗			三・三〇						〇・四九
粟			三・二〇						〇・七六

種類	1	2	3	4	5	6	7	8	平均
白米 (石)	一九・四五	三〇・三三	一七・九九	一七・〇〇	一七・四五	一九・三〇		一九・七九	一八・五七
玄米 (石)								二〇・六九	二〇・七四
小麥 (石)	九・〇五	一〇・一〇	* 一〇・一七	八・七九	六・〇九	一一・四四		一〇・七五	一〇・一一
ライ麦 (石)	八・七五								七・四四
大麦 (石)					一〇・七〇	三・三〇			一一・八二
裸麥 (石)	* 二六・八〇	一〇・三六	一〇・〇〇	二・一七	八・〇三				九・四四
燕麥 (石)	六・〇八	四・〇三	四・〇三	三・九〇		三・九〇			四・三九
蕎麥 (石)		九・〇九	五・三三	一〇・二五	九・〇七	五・〇〇			七・三三
黍 (石)	六・八〇	九・七三	一〇・五五						九・〇三
粟 (石)			* 一〇・〇〇						一〇・〇〇
稗 (石)			* 四・三三						四・三三
玉蜀黍 (石)	五・五六	七・八七	九・八八						九・四〇
馬鈴薯 (一〇〇貫)	三・三五	一・二八	三・三三	四・三四	四・六〇	一・〇三		一・三六	二・七六

價格は主として自家生産費又は購入價格により販賣價格ではない。

農家の生計標準

價 値 評 價 額 (大カロリー當錢)

種 類	1	2	3	4	5	6	7	8	平 均
白米	三・九五	四・一三	三・四五	三・四七	三・五五	三・九〇		四・四八	三・四
玄米							四・六八	四・四八	四・四八
小麦	二・六六	三・〇三	* 五・九三	二・五七	一・六九	三・一九		三・一六	二・九三
大麦	二・〇〇				二・一六				一・九〇
裸麥	六・一七	二・七七	二・七〇		二・一六				三・三三
燕麥	* 四・八八	二・八八	二・六八						二・七三
蕎麥		四・七八	二・六八		四・七六	二・七六			三・二六
黍	二・三三	三・三五	三・六三		五・〇五	二・六〇			三・〇二
粟			* 二・九一						二・九
稗			* 四・四九						二・九
蜀黍	一・九九	五・一三	三・三四	三・六七	五・一〇				三・八五
玉蜀黍	一・三三	一・三五	一・一四	一・六三	一・五九	三・七三		三・七三	二・〇三
馬鈴薯									

各種食料を温量にて計算比較すれば、ライ麥及び馬鈴薯最廉で玄米が最高であり、雜穀類は雜多であるが此中間に位するものである。( \* 印を附したるは不作等の際生産費を割宛たる爲、高價となれるものである故に、平均計算より除外した。 + 印購入の爲め高價となりたるものを示す )

食 料 費 額

1	總 額	自給額	自給率	消費單位勞働單位	消費單位勞働單位	總 額	自給額	自給率	消費單位勞働單位	消費單位勞働單位
三六・九六	一三・三四	五三・八	七〇・三三	七・六七	五	三八七・三三	一一三・七六	三九・六	六〇・六三	九三・五五

4	3	2	8	7	6
三三・一七	三三・八六	三三・五九	三八・〇八	三五・三三	二〇・九五
二二・三六	二〇・八一	二二・五二	三三・六一	一六・九五	一二・七〇
六九・九	六二・九	六八・一	三三・六一	六六・三	五九・六
四二・三二	五八・八一	六三・一〇	三三・六一	七〇・五三	六六・八三
五五・四三	七九・六三	五九・九〇	八九〇	七九・八〇	七三・九〇
			五八・九七	八五・七八	

自給比率は水田・畑兼營なる8に於て最大である。1、5、6は少い。販賣を主目的とせる經營の故であらう。概して家族數が多くなれば自給も多くなり食費は總額としては多くなるが一人當には少なくなる。

本稿は北海道農會主催農村更生講習會・農林省積雪地方農村經濟調査所主催講習會等に於て講演したるものに新しき材料を補足したものである。Zimmermann & Frappon: Family & Society は小林助教より借用した。北海道農事試験場經營試験の材料は同場代磨寫印刷物より計算した。場長安孫子技師は此の發表を許された。尙右印刷物材料の調整計算に従事せられたる同場安部技手・小野技手・藤原囃託・野上元囃託諸氏の勞を多とするものである。

(昭和十年十一月末)